

「子育てになやむ親の集い」連絡会の主旨

不登校・引きこもり・ADHD・LD・自閉症・発達障害等々の多様な子どもたちの存在が社会的問題として取り上げられ、各界の人たちがその対応及び解決策の模索を行っています。特に、子育て現場の最前線で苦闘している親たちやその家族の中には独りで思い悩んでいる人も多くいます。また、子育ての悩みを共有して親たちの会を作り、協働で問題解決に心血を注いでいる人もいます。しかし、問題解決の道のりが遠いことも事実のようです。

では行政はこれらの問題にどう対応しているのでしょうか。

埼玉県の行政の枠組みから考えますと、不登校問題は教育局「指導部生徒指導室」、ADHD・LD・自閉症等の問題は教育局「特別支援教育課」、引きこもり問題は「障害者福祉課」、就学前の子どもの問題は「子ども家庭課」が担当しています。

今回「子育てになやむ親の集い」を開催する理由はまさにここにあるのです。

行政の今の枠組みでは不登校・引きこもり・ADHD・LD・自閉症・発達障害等々の問題を行政は個々別々に対応せざるを得ず、また、これら子どもに係わる諸問題を「子どもの成長という連続性」という観点で対応できにくいようです。このように縦割り行政では行政がいくら努力しようとも、これら子どもに係わる諸問題をリンクして対応したりすることが難しく、手が届きかねる場面が多いのが現実です。

しかし、社会的引きこもりの60～85%は小中学校の時に何らかの形で不登校を経験している、という調査報告があります。また、ADHD・LD・自閉症等が要因で「いじめ」にあい、不登校になるケースもあります。また、就学前の子育てが要因で就学後に不登校になるケースもあります。このように子どもに係わる諸問題は鳶のように絡み合い、共有している部分があったりするので。更に大事なことは、行政では「義務教育就学前」「義務教育期間」「義務教育終了後」と区切りをつけざるを得ませんが、親たちには子どもに係わる諸問題に区切りや終わりがなく、常に連続した形で「子育てのなやみ」に対応しなければならないということです。

このように考えるとき、「子育てになやむ親の会や親たち」がリンクすることにより、情報の発信、情報の入手がより充実化し、さらに個々別々に活動していた親の会や親たちが連動することにより、親の会や親たちの活動が今まで以上に活発になり、より発展していくことができるのではないかと、また縦割り行政では手が届きかねる「横断的な対応や解決」が可能な島を私たちの手で開墾できるのではないかと、という主旨で「子育てになやむ親の集い」を企画した次第です。

子育てになやむ親たち、親の会をはじめ民間及び行政各関係機関の皆様方、不登校・引きこもり・ADHD・LD・自閉症・発達障害等々の問題に関心のある学生たち、大人たちが一人でも多く参加し、「自分の問題は皆の問題」「皆の問題は自分の問題」と考えることができるような「緩やかな連携」が誕生すれば幸いと考えています。

文責：子育てになやむ親の集い連絡会世話人代表 望月泰宏

